

# 短期大学と児童養護施設の連携活動

## —複数学科の特色を生かした食育活動と教育効果—

Cooperative Activities between a Junior College and a Children's Home:  
Nutrition Education and Educational Effects Utilizing the Special Features of Multiple Departments

座間味 愛理<sup>\*1</sup> 西田 江里<sup>\*2</sup> 近藤 直美<sup>\*3</sup>  
Airi ZAMAMI Eri NISHIDA Naomi KONDO

### 要旨：

本研究の目的は、短期大学と児童養護施設の地域連携活動を通じた学生への教育効果を抽出することである。複数学科が協働する食育活動の企画、子どもと大学生のペアを固定した活動内容、振り返りの仕方を教員が構成し、学生の主体的な学びとなるよう方向づけた教育効果について検討した。学生へのアンケート結果より、学生は①子どもたちの積極性や有能性に関する気づき、②学生自身が学んできた視点に基づいた気づき（子どもの姿に応じた対応、子どもの食への態度、子どもとのコミュニケーションや展開など）、③他学科との比較による自分たちの専門性への気づきが得られたことが示された。大学と児童養護施設が連携することによる教育効果、教員の役割、課題について整理し、多職種連携教育の可能性について考察した。

キーワード：短期大学 地域連携 食育 協働 教育効果

### Abstract：

The purpose of this study was to identify the educational effects on students through community collaborative activities between a junior college and a children's home. The study examined the educational effects of planning nutrition education activities in which multiple departments collaborated, the content of the activities with fixed pairs of children and university students, and the way the faculty structured and oriented the students to reflect on the activities so that they would learn proactively. The results of the questionnaire for the students indicated that students gained: (1) awareness of children's positivity and competence; (2) awareness based on their own learning perspectives (e.g. responding to children's appearance, children's feed preference, communication and development with children); (3) awareness of their own expertise through comparison with other departments. The results showed that the students were able to gain an awareness of their own expertise through comparisons with other departments. The educational effects of cooperation between universities and children's homes, the roles of teachers, and related issues were summarized, and the possibility possibilities of "Inter-professional Education" was discussed.

Keywords：Junior college, Community cooperation, Dietary education, Collaboration, Educational effects.

### 1. 研究の目的

本研究の目的は、本学が2022年度に初めて実施した複数学科協働型の児童養護施設との連携活動について

---

\*1 長崎短期大学保育学科

\*2 長崎短期大学地域共生学科食物栄養コース

\*3 長崎短期大学地域共生学科国際コミュニケーションコース

報告し、初年度の具体的な取り組みと学生へのアンケート調査の分析結果から大学生の学びの成果を抽出することである。特に、複数の学科の学生が児童養護施設で生活する子ども達を対象にそれぞれの専門的学びを基盤としたプログラムを企画し、子ども達との直接的な体験や振り返りを行うことで学生がどのような学びを得るかに着目して検討する。本稿は、これらの成果と課題から、大学と児童養護施設との連携の在り方や教員の役割、今後の可能性について考察するものである。

大学が児童養護施設と連携して活動を行うことは、地域貢献のひとつとして位置づけられる。また、大学側にとっては、学生の主体的な学びが促進されることを期待する実践的な教育活動となるため、連携先のニーズや双方の課題を踏まえた活動内容を検討する必要があるだろう。梅本ら(2014)の調査によれば、児童養護施設で生活する子ども達は家庭生活児童と比べて野菜の名前を知らないことや、年齢が高くなるにつれて食への肯定感が低いこと、調理経験がある子どもは食への肯定感が高く、自立後の自炊に関する不安感が低かった。これより児童養護施設の食育指導においては、幼児から小学生低学年までに食育体験を多くさせることが有効な指導であることを示している。そのような視点から、児童養護施設においては自立支援の一環として食育への関心やニーズがあると推察できる。

地域との連携活動は、大学にとっても学生の主体的な学び(アクティブ・ラーニング)が促進されることを期待する実践的な教育活動にもなるため、大学にとって意義のある活動になる。村田ら(2010)は大学による児童養護施設で生活する子どもへの食育支援の実践事例から、学生ボランティア(保育者養成校学生)においては、子どもと学生の担当制により安定した状態を保った活動が行えたこと、子ども一人ひとりにあった言葉かけや対応の仕方を学び、学生が積極的に参加するようになったとする報告がある。また、吉田・谷口(2019)は、施設側からの要望により余暇活動として定期的に料理教室を提供することにより、学生側は“教えることの難しさ”や“知識不足”、“コミュニケーション能力自体の不足”などを実感しながらも人としての成長にもつながったことを報告している。また更に、料理体験や大学生と接することによる子どもの変化や進路の幅が広がるなどの双方にとって肯定的な関係が確認できたとしている。

これらのことから、大学と児童養護施設で食育を中心とした連携活動を行うことは、子ども達の食生活の質を高め、将来の自立支援の一環としての意味合いをもつと同時に、大学生の学びにつながる活動として機能することが期待できよう。しかしながらこれらの先行研究には、複数学科の特色をいかした具体的な活動や協働による学生の学びや教育効果に着目したものはない。また、本活動の教育効果を高めるためには、他学科教員間の連携と対象となった児童養護施設の職員の協力も大きいことから、本活動は近年大学教育において重視される「多職種連携教育(IPE: Inter Professional Education)」へ発展する可能性を含んでいる。イギリスのCAIPE(Centre for the Advancement of Interprofessional education)は、IPEを「複数の領域の専門職者が連携およびケアの質を改善するために、同じ場所でも学び、お互いから学びあいながら、お互いのことを学ぶこと」“Interprofessional Education occurs when two or more professions learn with, from and about each other to improve collaboration and the quality of care”(CAIPE 2002)」と定義している。本活動においても、保育士や栄養士、多文化コミュニケーションについて専門的に学ぶ学生たちが他の職種の役割や専門性、また自身の職業の専門性や責任を理解するための教育と位置づけることができよう。以上のことから本研究は、大学と児童養護施設の連携によって得られる教育効果と課題を整理し、今後の学生教育と地域への社会貢献活動に資することを目的とする。

## 2. 本学における地域活動(地域連携)

本学は、地域共生学科(食物栄養コース(以下、栄養コース)、製菓コース、介護福祉コース、国際コミュニケーションコース(以下、国際コース))と保育学科をもつ地域に根差す職業人養成を使命とする短期大学である。ほとんどの学生が2年間の短期間で職業選択に準じた資格取得を目的として修学する。在籍中は、ボランティア活動などの地域活動にも積極的に取り組むことが推奨され、卒業生の8~9割が近隣地域の専門職に就いている。その卒業生が職業人となり、実習やボランティアを通して学生たちの指導者となることも多い。よって、

地域活動の実施にあたっては、大学と関連施設が相互に連携しながら地域の人材を育てていく関係にあると言える。

学生が関わる多くの地域活動は、主に学科ごとの学びの目的に沿った対象施設との連携が基本となっている。例えば、栄養士や製菓などを専門とする学科においては、食品開発や地域の食品販売店との連携により企画が交わされ、授業でのアクティブ・ラーニングやボランティア活動に組み込まれる形で実施される。このような地域活動は言わば学科完結型の地域活動とも言える。一方、他学科の教員や学生がそれぞれの専門性や学びを活かして協働し、地域貢献を行うという経験は多くはない。自分たちが学んできたことのみならず、多職種の理解や視点を意識する中で、新たな学びの視点が得られることが期待される。このような状況において本事業は、2021年度に複数学科の学生が協働して体験的学びを得ることを目的とした地域連携活動が企画された。しかし、2021年度は新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から中止となり、翌年の2022年に再企画し実施された。

### 3. 本活動の特色

#### (1) 教員の教育的意図とプログラム構成

本活動は、実践活動を通して学生の専門性を深めるという教育的意図を持っているため、実施においては各学科コースの教員が担当する授業に位置づけて行った。栄養コースは学科必須科目である「地域と人々」において、本活動を選択した学生、語学力を活かした多文化理解と企業人を養成する国際コースの学生のうち、「サービスマーケティング」を履修する学生、保育学科は同僚性を構築する心理学的スキルを学ぶ「卒業研究（ゼミ）」を履修する学生に参加を呼び掛けた。教員間で事前に協議した結果、学生の学びと対象者への配慮という観点から、学生は活動前に児童養護施設で生活する子どもの理解について事前学習を行うことを参加条件とした。

事前学習として栄養コースは、対象者の年齢における特徴の振り返りや参加する児童の特性を踏まえたうえで活動目的を設定し、これまでにコースで実施した児童を対象とする地域活動の中から適当だと思われるものを選択した。実施に向けては児童に対するプレゼンテーションやコミュニケーションについて検討する時間を設けた。国際コースでは、本活動を「相手を考えた情報発信力」、「協調性」、「主体性」、「コミュニケーション力」、「柔軟性」をつける機会として位置づけ、事前準備に5コマほど費やした。事前活動としては「ぼくらの願い：児童福祉施設入所児童作文集」を読み、レポートを課した。保育学科は、1年次に履修した「児童福祉施設実習」の振り返りを行い、施設で生活する子どもの環境と理解、保育士やその他の専門職との連携について振り返りを行った。

各コースでの目的やねらいを共有するため、教員側から「げつようびはなにたべる」という絵本を活用すること、後半のプログラムでは絵本に出てくる料理を栄養コースの学生が作り、全員で食す中で食への関心や自己表現が広がり、子どもと学生の交流が促されることを意図していることを学生に伝えた。活動当日の前半のプログラムは、年齢別で2つのプログラムに分けた。主に未就学児は保育学科の学生が担当し、小学生以上の子どもは栄養コースと国際コースで担当した。また、子ども達が初めての場所でも安心して過ごせるよう、学生が子どもとの直接的な関わりによって理解が深まることを期待して、活動中は子ども1名に対し学生1名のペアを固定して過ごすことを重視した。学生たちは活動前にペアとなる子どもの性別や年齢、施設での様子や特徴について口頭で知らされた。ペアとなる子どもを想定した上で、プログラムの内容や役割分担等は、各コースの学生が主体となって企画した。表1に学生の準備過程と当日の活動プログラムをまとめる（活動の様子は写真1～5参照）。活動後には振り返りと学科を超えた体験のシェアリングを行い、子どもの理解と必要な配慮について学ぶ機会となるよう構成した。

表1. 各学科コースの学びの構成

	保育学科学生 (2年生・10名)	食物栄養コース (2年生・6名) ※1年生20名は調理のみ担当	国際コミュニケーションコース (1年生・7名)
位置づけた授業	卒業研究(選択)	地域と人々(選択)	サービスマーケティング(選択)
1. 事前学習	・施設実習の振り返り	・参加児童についての確認 ・学童期に関する振り返り	・児童養護施設で生活する子ども の文集を読む
共通	・子どもの情報共有 ・ペアリング ・配慮事項の確認 ・プログラムの企画		
2. 当日プログラム	A: 未就学児(2歳~6歳)10名		B: 小学生12名
共通	短大の紹介 お名前呼び ペア発表		
	・ペアで名札づくり ・手遊び ・食材お宝探し	・自己紹介 ・野菜の色についての実験	・自己紹介 ・英語あそび
共通	絵本「げつようびはなにたべる」を読む		
共通	絵本に出てきた料理を食べよう(食事会)		
共通	今日の思い出を作成。学生から担当の子どもに渡してお見送り		
3. 当日振り返り	ミニミーティング	ミニミーティング	ミニミーティング
共通	学びのアンケート・体験のシェアリング		
4. 事後学習	・施設職員からの手紙の共有		・児童養護施設の子どもの発達 に関する授業受講

(2) 実施の協力背景

本活動に理解を示し、協力を得た児童養護施設(以下、A施設)は、長年保育学科の実習先でもあり、卒業生が多く就職している施設である。本活動の実施前には、A施設の職員らと打ち合わせ、企画の趣旨説明と子どもの情報(ペアリングに必要な年齢や留意する点など)を共有した。施設側においても、プログラムを想定した職員配置などを検討がなされた。また、本活動が食育活動を実施できた背景には、本学の地域活動に協力するフードバンク企業の存在もある。当日の食事会のメニューの一部は、フードバンクからの食材提供を受けて栄養コースの学生が調理した。活動に要する費用は本学が負担し、A施設の費用負担はなかった。



「げつようにはなにたべる」の読み聞かせ(保育)

4. 教育効果に関する分析

当日のプログラムの実施後、参加学生22名に対し2回のアンケートを実施した。まず、子ども達を見送った直後の学科コース別ミニミーティングでは、印象に残ったこと、ペアとなった子どもの様子、対応に苦慮した点や反省点について教員と共に振り返りを行って記入した。その後、学生全員が集まり、学科コースの代表学生がミニミーティングで報告された体験内容を報告(シェアリング)した。最後に、他学科の発表を聞いて気づいたことや異なる視点、自分が学んでいることの専門性に関するアンケートを実施した。以下、アンケートの結果を表2~6に整理する。



一緒に“お宝食材”を探そう（保育）



野菜の色の実験（食物栄養）



英語あそび(国際コミュニケーション)



『月ようにはなにを食べる』に出た食材をつかった昼食（食物栄養）

(1) 参加した学生のこれまでの経験について

学生の食育活動と児童養護施設の子どもに関わった経験について尋ねた。経験は、「1. 多い」（日常的な学習・定期的なボランティア・専門的に学んだ）、「2. ある」（体験学習や実習など集中的に経験）、「3. 少ない」（研修やボランティアで数回）、「4. 全くない」（初めて経験する、学んだことはない）のいずれかで回答した。食育経験については、主に栄養コースの学生は経験があり、保育学科と国際コースの学生はほとんど経験がなかった。子どもに関わった経験については、「多い」「ある」と回答した学生が9名（40.9%）であったが、ほとんどが保育学科の学生であり、参加した学生の約半分は施設で生活する子どもに関わった経験が全くない状態であった。

表2. 参加した学生の経験について（N = 23）

学科・コース	食育経験				施設で生活する子どもとの関わり経験			
	1. 多い	2. ある	3. 少ない	4. 全くない	1. 多い	2. ある	3. 少ない	4. 全くない
栄養コース	0	3	2	0	1	0	0	4
国際コース	1	0	3	4	0	1	0	7
保育学科	0	1	3	6	0	7	1	2
計	1	4	8	10	1	8	1	13

(2) 学生の印象に残った内容について

アンケート結果を表3に整理する。全学生の共通点として挙げられるのが、子ども達が楽しめるようにイベントの準備に努めたこと、子ども達の積極的な参加がイベント本番時に見られたことへの喜び、活動自体の楽しさ、の3点である。「積極的に発表する子どもたちが多かった。（栄養コース）」、「どんなことにも好奇心や興味があるのが見え、実験にも積極的に参加してくれていたことがとても印象に残り、嬉しかった。（栄養コース）」とあるように、実験に対する子どもたちの積極的な参加に対して印象に残った学生が多く、やりがいについての言及が多かった。また、子どもたちがとても元気で、楽しそうにしていたことや、日頃子どもたちと話すことに慣れていないため、いい経験になったとも述べている。「特に子どもと関わる機会がないので、と

でも貴重な1日になった。子どもたちが積極的で私達も凄く進めやすかった。(国際コース)」という意見が国際コースの今回の参加の意義の集約であろう。保育学科では、交流会当日の子どもたちの様子に関する言及が多く、子どもたちが助け合いながら活動に積極的に参加する姿、「宝探しでまだ見つけられていないお友達の方も自ら一緒になって探していた。」という印象や「ゼミの宝物探しなどの出し物をしている時に自分が担当した子どもが、『はやく遊びたい』と発言をしたこと(保育学科)」、「継続して行うことが難しく、声掛けが少し難しかった(保育学科)」など、計画通りに進まない難しさへの気づきが特徴的であった。

表3. 印象に残ったこと(学科ごと)

保育学科	<ul style="list-style-type: none"> <li>・宝探しや食材になりきるゲームを楽しんでいたこと。</li> <li>・どうすれば子どもが楽しめるか考えながら準備したこと。</li> <li>・宝探しでまだ見つけられていないお友達の方も自ら一緒になって探していた。</li> <li>・ゼミの宝物探しなどの出し物をしている時に自分が担当した子どもが、「はやく遊びたい～」と発言をしたこと。</li> <li>・継続して行うことが難しく、声掛けが少し難しかった。休憩のときにヒートアップしたときの止め方がわからなかった。</li> <li>・子どもたちが宝を一生懸命探し、友達の分まで教えてあげていたこと。</li> <li>・子どもたちにとって、どんな装飾をすれば、喜んで楽しめるかなどを考えたこと。</li> <li>・宝探しを自分のパーツ以外も探していたり子どもたちの中で貸し合いを見ることが出来た。</li> <li>・子どもは気になった場所にはすぐ行って、どんな感じなんだろうなど行動に移していた。</li> <li>・宝探しの時に見つけられない子どもにほかの子どもが場所を教えてあげていた。</li> </ul>
栄養コース	<ul style="list-style-type: none"> <li>・準備ではどうしたら分かりやすく伝えられるかを考え、わかりやすい言葉で伝えるように努力した。当日は子供たちと楽しくイベントを楽しむことが出来たと思うので良かった。</li> <li>・積極的に発表する子どもたちが多かったこと。</li> <li>・子どもたちは、意外と自分の力でなんでもできるんだなと感じた。また、活動ではみんな積極的な姿勢で取り組んでおり、非常にやりがいを感じた。</li> <li>・野菜を知ろうの際、紫キャベツにレモン汁や重曹を加えた時の子供たちの様子。</li> <li>・私が担当したペアの子は小学4、5年生だったため、とても活発で活動的な子でした。どんなことにも好奇心や興味があるのが見え、実験にも積極的に参加してくれていたことがとても印象に残り、嬉しかった。</li> <li>・実験では野菜の色が変わると子どもたちが驚いたり、なんで変わったの? など興味を持ってもらえてよかったです。</li> </ul>
国際コース	<ul style="list-style-type: none"> <li>・皆と一から何かを作るのは、初めてだったので1番印象に残りました。</li> <li>・準備はギリギリまで色々忙しくて、バタバタしてたので、本番大丈夫かなとか、関わったことがない子たちだったので、不安な部分や緊張してた部分がありましたが、当日はほんとに楽しくて、特に国コミは子どもと関わることがないので、とても貴重な1日になりました。とっても元気な子たちでいい子たちばかりだったなという印象でした!</li> <li>・子どもたちが積極的で私達も凄く進めやすかった。</li> <li>・準備が大変で、心配な部分もあったけど、それを感じさせないくらい子どもたちが元気でこっちも凄く楽しく進めることが出来た。私が前に出て発言をしたあと担当していた男の子が、「すごく緊張してたでしょ!」と言われてドキッとしたけど、凄いいね!と言って拍手してくれたのが1番嬉しかったし、印象に残った。</li> <li>・子供たちが楽しそうにしていたこと。</li> <li>・子供達がとても元気でした!子供達と話すのが慣れていないのでとてもいい経験でした!</li> <li>・子供の様子</li> <li>・英語の勉強</li> </ul>

### (3) ペア活動を通じた気づき

アンケート結果を表4に整理する。学生の自由記述には、「子どもたちがどうしても野菜に苦手意識があり、食べるのが大変そうだったので自分が栄養士となった際には味の工夫や切り方の工夫をして野菜をできるだけ食べて貰えるように努力したい(栄養コース)」、「自分の意思で、思い立ったらすぐに1人で走って行ってしまおう子だったから、突発的な子に対する対応を学びました(保育学科)」、「私たちが元々考えていたルールとは、違うやり方で、子どもたちがやろうって言うてくれて、そのやり方もあるな、そっちの方がやりやすくなって思った部分があった(国際コース)」という内容が得られた。学生たちは子どもの活動場面や食事場面での関わりを通して、子ども達の個性や多様性に言及し、それぞれの視点で学びと関連づけていた。中には、「どんな話をしたらいいのか、話し方などどう接したらいいのかすごく難しいな(栄養コース)」と述べた学生も

いた。学生によっては、子どもとコミュニケーションをとることに緊張感を持っている場合や、施設で生活する子どもと何を話題にして良いか考えてしまう学生もいるだろう。学生と子どものペアを組む際には、予め教員側で学生のレディネスを含めた情報共有をすることや、当日、ペアでのやり取りに難しさを感じている際の介入方法について体制を整えていく必要があることが考えられた。

表4. ペアで活動した子どもの理解 (学科ごと)

保育学科	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1対1で関わることは少ないので、自分たちにとっても貴重な時間だなと感じた。</li> <li>・「わかんない」という子どもの発言に対して、選択肢を与えると答えが見つかること。</li> <li>・最初はあまり話さなかったけれど、少しずつ子どもに質問をしたり、共感するうちに色々なことを子ども自らお話ししてくれるようになった。</li> <li>・自分のペアの子どもの性格について、関わっていくうちに知ることができた。</li> <li>・一緒に何かを試みることはいいと思った。子どもが自分から言いたいと伝えてくれ、子どもの自主性を学ぶことができた。</li> <li>・特徴などは前に聞いたが、実際に会ってみると好奇心旺盛で自分のことたくさん教えてくれてとても楽しそうだった。</li> <li>・自分の意思で、思い立ったらすぐに1人で走って行く子だったので、突発的な子に対する対応を考えた。</li> <li>・最初は言葉をあまり発してくれなかったけど、一緒に過ごしていくうちにたくさん話を話してくれたり、一緒に歌を歌ったりしてくれて、短時間の中では深い関わりが出来たのかなと感じた。</li> <li>・夢中になっている子にはその夢中になっていることを一緒に楽しむことで、子どもから自分の考えを伝えてくれるようになった。</li> <li>・年齢によって同じ遊びでも楽しみ方に違いがあるように感じた。年下の子どもは年上の子どもの行動を真似することが多かったので、危険なことをしている時には早く注意して、広がるのを防ぐ必要があると思った。</li> </ul>
栄養コース	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもたちがどうしても野菜に苦手意識があり、食べるのが大変そうだったので自分が栄養士となった際には味の工夫や切り方の工夫をして野菜をできるだけ食べて貰えるように努力したいと思った。</li> <li>・好奇心旺盛で、たくさん話してくれる子たちばかりで、企画によって、化学や英語の難しいことも覚えてくれるということを学んだ。</li> <li>・積極的に活動を行っている姿や話しかけてくれる姿勢がとてもよかった。実験では、私たち大人が気づかないようなところに目を向けていて、すごいなと思った。</li> <li>・どんな話をしたらいいのかや、話し方などどう接したらいいのかすごく難しかったと学んだ。</li> <li>・10歳も差がある子どもたちと交流する機会は日常生活の中ではもちろん学校でもほとんどないため、自分よりも年下の子どもたちと交流することで自分が小学生だった頃など若い頃を思い出すことができ、とても楽しく感じた。参加者の皆さんに楽しくイベントに参加していただくことでやりがいを感じた。</li> </ul>
国際コース	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ゲームの時に、私たちが元々考えていたルールとは、違うやり方で、子どもたちがやろうって言うてくれて、そのやり方もあるな、そっちの方がやりやすくなって思った部分があったので、子どもたちの意見も取り入れたり、子どもたちがやりたいようにやらせてあげるっていうのも大事だなって気づいた。</li> <li>・人が気づかないようなところにすぐ気づく子もいたし、いっぱいお話ししてくれる子もいた。一緒に会話しているうちにとても仲良くなれた。すごく色々なタイプの子供たちがいた。</li> <li>・コミュニケーション力を高めることができた。</li> <li>・人それぞれ考え方や個性がちがう。</li> <li>・笑顔で接して、同じ目線で一緒に楽しむことが大切だと学んだ。</li> <li>・対話することで子どもたちの考えや疑問がわかり、教えることは難しかったが楽しく活動ができた。</li> </ul>

#### (4) 専門性や他学科への気づき

アンケート結果を表5に整理する。学科コースごとのミニミーティング後に他学科の発表を聞くことによって、対象を理解する視点の違いに気づいたと言及する学生が多かった。「私には見えていなかった点を保育学科は意識して視点を置いていたため、自分が学んでいる内容によって視点を置く場所が違うことを実感した(栄養コース)」「保育学科から場面の切り替えという話や国際コースからコース間の連携の話があったため、そこに注目して気をつけたい(国際コース)」とあるように、他学科や学びの違いが他者への理解と対応の違いがあることを実感したことが窺える。また、「私たちのコースでは実験や調理などをすることで、児童に楽しんでもらうことができる(栄養コース)」「子どもとの関わり方の違いが他学科とは違っていて、保育を専門として勉強しているからこそできる関わりがある(保育学科)」というように、自分の専門性やアプローチの違いに自信を持つような言及も見られた。活動後に学科コースを超えたディスカッションを構成することにより、自分自身の専門性や2年間の学びの理解が深まったと考えられる。それは、本活動を2年次の秋に行った行事であるからこそその効果であると言えるだろう。

表5. 他学科学生との振り返りを通じた気づき(学科ごと・無記名)

保育学科	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 保育を学んでいる自分たちとは違う視点や考えがあることを学んだ。</li> <li>・ 国際コミュニケーションの学生から、「単語が多く難しく子どもたちがあまり理解していない」という発言があったということについて、子どもたちのことを前もって考察する難しさを改めて感じた。</li> <li>・ 小学生との関わりの中で、どのようなことを感じたのかがわかった。</li> <li>・ (学生が調理した)お昼ご飯は、とても美味しく、子どもたちも美味しいと言っていたので、とてもよかった。</li> <li>・ 他学科が子どもとのやり取りに苦戦していることがわかった。そう考えたときに、子どもと関わる私たち(保育学科)はとても楽しい体験になった。</li> <li>・ 子どもとの関わり方の違いが他学科とは違って、保育を専門として勉強しているからこそできた関わるができた。</li> <li>・ 小学生と幼児では活動への取り組み方や落ち着き方が異なっているように感じた。幼児は自分のことをまだ完璧にできない分、手を貸すところが多く、どこまで手を貸していいのか分からない場面がある。逆に小学生だと自分で基本的なことをできる分、どのような声かけ等が必要になってくるのか考えることも大切になってきていると思った。</li> <li>・ 学科ごとに異なった反省があり、それぞれの分野で大変なことがあったのだなと思った。</li> <li>・ 子どもと関わることがあまりない分子どもの実際の姿がわかりにくいのかなと感じた。</li> <li>・ ほかの学科は子どもたちが専門分野ではないということもあって反省をさいて視点も違うなと感じた。</li> <li>・ 子どもに対する、遊びの提案のむずかしさを感じた。</li> </ul>
栄養コース	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 丁寧に分かりやすく説明をしていた。</li> <li>・ コースによって、気づいていることが違っていたので、専門で学んでいることが違えば、見る視点も違うことが分かり、面白いと感じた。</li> <li>・ 自分が専門的に学んでいることを活かして第三者の人に発表するのは自分も相手にも勉強になっていい事だなと思った。</li> <li>・ やっぱ、保育の人たちは、子どもたち目線で、それを専門にやってるから、対処の仕方やコミュニケーションの取り方が違うなと思った。それでも、私たちは自分からコミュニケーションをとりに行ってたし、結構話題もたくさん出てきてとっても仲良くなれたので、結局は保育コースだろうが、国際コミュニケーションコースだろうが、関係ないし、そういう勉強をしてもしてなくても、コミュニケーションは取ろうとすれば、ぼんぼん話題も出てくるし、話も続くから自分の意思とか、話したいっていう気持ち次第なのかなと思った。</li> <li>・ 食品栄養のコース子どもたちがとても興味を持って自ら実験に取り組んでいたのもとても良かった。</li> </ul>
国際コース	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 私には見えていなかった点を保育学科は意識して視点を置いていたため自分が学んでいる内容によって視点を置く場所が違うことを実感した。</li> <li>・ 保育の人たちは、子どもたちの目線になって楽しくする工夫をされていてすごいと思いました。国コミの人たちは、表情からとてもよかったし、ゲームなど子どもたちがしやすく、わかりやすい内容でとても楽しめたと思った。</li> <li>・ 子どもたちの積極性がとてもあり、私たちも活動をやりやすくてよかった。</li> <li>・ 英語など、低学年の児童の方にとっては難しい内容だったかもしれないけれど、楽しくできる内容を考えていて良かったなと思った。</li> <li>・ 私たちのコースでは実験や調理などをするので、児童に楽しんでもらうことができると思った。</li> <li>・ 英語の授業を行い、歌を使ったりゲームを行なって楽しく英語が学べた。</li> <li>・ 保育コースから場面の切り替えという話や国コミからコース間の連携の話があったため、次はそこに注目して気をつけたい。</li> <li>・ 私たちがしたいことに対して子供の注目を集めるのが小学生以下だとすごく難しいんだなと感じ、小学生でも高学年、中学年、低学年で英語への親しみ方、実験への親しみ方が全く違うんだなと思いました。みんなが楽しんでくれていたので凄くいいイベントになったと思った。</li> </ul>

#### (5) 学生の反省点

アンケート結果を表6に整理する。学生の反省点においても各学科コースで着目点が異なる傾向がみられた。栄養コースは「コミュニケーション」に関する内容が多くみられた。対応した児童が小学生以上であったため、児童は自ら活動に参加していたが、活動の中で児童に対しどのように接するべきかについての反省であると考えられる。日常的に児童と接する機会が少なく、またコロナ禍の中でそのような機会をもうけることができなかった事によるものと考えられる。国際コースの学生からも児童への接し方についての反省が多くみられたが、栄養コースと比較すると、自身が担当した児童一人一人に対し深く向き合っていたことによる反省ではないかと考えられる。国際コースは他学科コースと比較して多くの事前学習時間を費やしており、児童養護施設についての学習を行うなど児童の状況や特性についても学ぶ機会があった。よって、事前学習で学んだ内容を踏まえて自身の行動を振り返ることができたのではないかと推察する。保育学科においては「子どもとの関わり」

「子どもへの声かけ」等、保育者として子どもと関わることを学んでいるからこそその言葉が見られ、幼児を活動に参加させようとしていたが上手くできなかった部分に関する反省点がみられた。

表6. 学生の反省点 (学科ごと・無記名)

保育学科	<ul style="list-style-type: none"> <li>・空き時間や待ち時間の子どもたちとの過ごし方が難しかった。</li> <li>・他の学生への手助けができていなかった。</li> <li>・実施している内容と異なることに夢中になっている子どもへの対応が難しかった。</li> <li>・落ち着かない時の声掛けが難しかった。</li> <li>・子どもの集中が途切れた時の活動への促し方がわからなかった。</li> <li>・予想できないことも多く、実際にやってみると上手くできなかった部分があった。</li> <li>・ひとりの子とペアで半日関わるが大変だと感じた。</li> </ul>
栄養コース	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分が緊張しているのが子どもにも伝わってしまったため、緊張を表に出さずに話すことが大事だと思った。</li> <li>・もう少しいろんな話ができかなあとと思った。</li> <li>・子どもたちの目線に立って、話すことが大切だと感じた。</li> <li>・コミュニケーションが上手く取れないことが多々あった。</li> <li>・子どもの様子に応じた判断力やコミュニケーション力が必要だと感じた。</li> <li>・子どもからの質問に答えられなかったり、話しかけるのを戸惑ったりしたことがあった。</li> </ul>
国際コース	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分のペアの子のことばかり考えていて、見るの精一杯で、他の子どもも喋りはしたんですが、深く関わることがあまりできなかった。</li> <li>・児童養護施設の子どものことを気にしすぎたあまり、聞いて良いことなのかダメなことなのかを頭の中で判断しながら会話していたため、上手く会話できない時があった。</li> <li>・もっといろんな子どもたちと話せたらよかった。</li> <li>・少し目を離した間に見当たらなくなってしまうことがあった。</li> <li>・他学科・コースとの情報共有が不足していて、事前の準備や当日の段取りが上手くいっていないところがあった。</li> </ul>

## 5. 結論とまとめ

各学科コースが児童養護施設を対象とした連携活動の意義と教育効果についてまとめる。栄養コースは栄養士取得を目的としており、養成課程における校外実習や卒業後の就職先の1つとして児童養護施設がある。今後の校外実習先の候補の一つとして、また就職候補の1つとしてコースの学生・教員が施設と共に活動できたことの効果は大きい。また、コロナ禍において食の提供を伴う活動の難しさがあったが、施設児童という特定多数の参加者を対象とした活動を行うことで、本来コースが考える児童対象の地域活動が実施できたのではないかと考える。栄養コースでは地域活動における学びを資格取得のための様々な専門科目で得た学びの統合として位置付けている。本活動で2年生は「野菜の色に関する実験」に取り組んだ。野菜を使った食育活動は野菜に対する興味関心から野菜を食べようとする意識を生じさせる効果があるとされている(曾我部ら, 2016)。一般に児童の苦手な食べ物として野菜が上げられることが多く、実験によって使用した野菜を昼食として提供することにより野菜を食べる意識を生じさせる効果を狙ったものであった。「応用栄養学」「栄養指導論」で学んだ児童の特性より、野菜が苦手な児童を対象とした活動として実験を選択し、実験の実施においては「食品学」「調理学」で学んだ食品の性質や調理特性に関する知識を活用した。実施の際の説明やのデモンストラーションにおいては「栄養指導論実習」等で学んだプレゼンテーション技術を活用した。今回は活動の結果児童が野菜を食べることができたかについての検証ができていなかったが、今後の活動においては昼食時の残食調査やアンケートの内容より効果の有無まで検証したい。

国際コースは留学生を主体とした異文化交流会などが地域連携としての主たる活動であり、児童養護施設と国際コースの接点はなかなか発想がなかった。しかし、食育を通じた文化交流プログラムや英語の絵本を使用した活動による言語支援の提供など本コースの特色と紐づけた地域連携の可能性が本活動で見出すことができ、地域連携のコンテンツをひとつ増やすことができた機会であった。国際コースでは今年度からサービスラーニングにおける活動内容を一新し、本活動は新しいサービスラーニングのキックオフイベントとなった。Janet Eyler (1999)によれば、サービスラーニングは、教育的な目標を達成するために、学生が自己に関する学びを経験し、社会奉仕をすることを組み合わせた教育手法である。サービスラーニングの履修者の中には自己理解に困難を感じる学生や将来の進路に迷う学生もいる。しかし、本活動で児童福祉についての学びを通して社会的視野が大きく広がり、自己の能力を認識し、社会貢献を通じた成長が大いにあった。また、複数学科での

協力について教員を含め、チームワークの重要性について学びきっかけになったともいえる。本活動はまさしく「サービスマーケティング」の定義と合致し、次年度以降も継続的にコースの学びのひとつとして取り入れたい活動である。

保育士と幼稚園教諭の資格取得を目標とする保育学科においては児童福祉施設実習があるため、教員は日頃から児童養護施設と連携することが多い。また、就職した卒業生が本学の学生指導に携わる機会もあることから、情報共有がしやすく、人材育成を目的とした要求や課題を通して連携しやすい関係にあると言える。学生たちは実習経験を基盤に個別対応を経験することができた。実習では長時間の個別対応をする機会は少ないため、ペアとなった子どもの個性と適切な対応だけでなく、難しさや大変さを実感した。プログラム中、子どもが「早く遊びたい」と言った発言の背景には、プログラムが子どもにとって自発的な”遊び”となっていないのではないかという反省を含む省察もあった。また、ゼミの学習テーマであった”同僚性”を構築する視点においても、「他の学生への手助けができなかった」という協働の視点や他コースの視点の違いから自らの専門性への気づきが多く語られた。

このように、各学科コースによって児童養護施設との接点の違いがあるため、地域活動を行う際には施設や子ども達にとって有益であることと複数学科の特色を踏まえた学生の学びを可能にする“目的のすり合わせ”が連携の要となろう。今回の企画は「食」をテーマとしたため、食育や食材を用いた実験、食に関する英語など各学科コースで学生がアレンジしやすいテーマであった。

最後に、本活動における教員の役割と多職種間の連携について考察する。今回の教員の重要な役割のひとつは、事前のプログラム検討と学生と子どものペアを構成することであった。それを可能にするためには、教員が把握する学生情報と“予想される子どもの姿”に関する施設側からの情報が不可欠であった。また、活動後には施設職員から感想や子どもの様子、意見を学生と共有した。施設職員の視点を得ることで、環境構成に関する反省点や普段の子どもの様子を踏まえ振り返る等の新たな教育的課題が得られた。このような点から、本活動は学内教員だけでなく、現職の社会福祉士や指導員とも連携した多職種連携教育への発展性を含んでいることが示された。今後は、授業計画と到達目標の設定を踏まえた成果をどのように保障していくかについて議論していく必要がある。

## 6. 今後の課題

本活動の教育効果を検討するにあたり、活動実施後の学生へのアンケート結果のみを分析した。より多角的な効果を検証するには、活動前後の学生個人の経験を丁寧に把握することも必要である。また、単発の活動は、学生が得た学びと課題を次回企画に反映させることは難しい。短期大学の2年間の中で、多職種連携教育の機会を確保するためには、活動の継続と事業化など予算確保も課題である。

### [謝辞]

協力してくださった児童養護施設 A 施設の職員の皆様、参加してくれた子ども達、食材を提供して下さった(一社)フードバンク協和様、調査に協力してくれた学生の皆さんに感謝致します。

### [参考文献]

- 1) CAIPE2002, < <http://www.caipe.org.uk/> > (2023年3月15日閲覧)
- 2) Eyler, J., & Giles Jr, D. E. (1999) Where's the learning in service-learning?. Jossey-Bass.
- 3) 村田恵子・野上晃司・田淵三由季・尾谷真理・本田真美・菊永典子・河合富美子 (2010) 「施設・大学の協働による児童養護施設児童への食育支援の試み」『就業教育実践研究』第3巻, 149-160頁.
- 4) 曾我部夏子, 宮本雄基, 大槻優紀, 篠原能子, 井上浩一 (2016) 「幼児の野菜摂取増加を目指した食育教室および食育ツール開発についての検討」『日本食育学会誌』第10巻第4号, 289-296頁.
- 5) 梅本奈美子・布施晶子・杉浦正美・鈴木正子・岡見雪子・辻とみ子 (2014) 「児童養護施設における自立支援のための食育システムの開発」『日本栄養士会雑誌』第57巻第5号, 34-43頁.
- 6) 吉田裕一郎・谷口美佳 (2019) 「大学と児童養護施設の連携活動による大学生と入所児童の成長についてー料理教室の取り組みからー」『四天王寺大学紀要』第67号, 355-368頁.